AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 () 平成20年度:16-17.

小児の発達段階に沿った看護介入の検討：5歳児の感染予防行動を通して

土橋, 亜由美 ; 澤田, みどり

小児の発達段階に沿った看護介入の検討
～5歳児の感染予防行動を通して～

4階西ナースステーション　○土橋亜由美、澤田みどり

【はじめに】

小児の発達において、清潔観念に基づく行動は教えなければ身に付かないものであり、幼児期の発達課題は、うがい、手洗いといった清潔行動を習慣化し、その習慣の内面化を行うことであるとしている。今回、急性骨髄性白血病(以下AMLとする)の治療で易感染状態にある5歳患児を対象とし、感染予防行動、特に清潔観念の獲得を目的として患児の自主性に働きかける介入を行った。その結果を振り返り、介入の要素について検討したので報告する。

【概念規定】

行動の習慣化：目的や必要性の理解には至っていないが、清潔行動を繰り返して行えること。

習慣の内面化：習慣化した清潔行動の必要性や目的を理解し、子ども自身の意志で行動化できること。

【目的】

幼児期の患児が清潔行動を獲得するために役立つ、介入要素について明らかにする。

【研究方法】

1．研究期間：平成18年7月～平成19年9月
2．研究対象：臍帯血幹細胞移植を行った患児1名
3．研究方法：事例検討
4．調査方法：患児の日常生活を観察し、又看護記録から、清潔行動に関連した患児の言行や観察された事象を抽出した。
5．倫理的配慮：研究目的とプライバシーの保護、又自由参加であり不参加による不利益が無いことを書面と口頭で説明し、研究協力と結果公表の同意を得た。

【事例紹介】

1．事例紹介：Aちゃん　女児　5歳
　疾患名：AML
　家族構成：父、母、妹
2．臨床経過

H18年風邪症状で近医受診。血液検査で汎血少板減少を認め、精査、治療目的でB医大に入院。AMLの診断で化学療法開始する。治療中に敗血症を繰り返すが、H19年臍帯血幹細胞移植を実施。順調に経過し退院。

3．獲得課題

清潔習慣の内面化ができる。

【結果】

第1期：母の模倣から始まる清潔行動

入院後、含嗽ができず、泣いて拒否を続けていた。はじめに、清潔行動の実施を目的として、患児だけではなく、母に清潔行動の必要性を説明した。その後、母から「これ(含嗽)大事なんだよ。これできなかったら痛くなるんだよ。」という言葉が聞かれ、実際に母が含嗽をやって見せる姿があった。結果、患児は道具を準備すれば、手洗いや含嗽を行うようになった。

第2期：清潔行動の習慣化へ向けた動機付け

次に清潔行動の習慣化を目的とした。患児がより清潔行動に興味をもてるように、看護学生が、「上手に清潔行動ができた時にシールを貼る」成果表を作成。結果、患児の努力の結果が視覚的に明らかとなり、すすんで含嗽をするようになった。ままごと遊びの中でも含嗽をする姿がみられた。

第3期：清潔習慣の内面化

徐々に清潔行動の習慣化がみられたが、患児はその後に2度、敗血症をおこす。移植を控え、清潔習慣の内面化を目的とし、「アニメキャラクターのポスター」を看護学生が作成した。看護師は患児の行動を観察し、ポスターにあわせて、清潔、不潔の区別を繰り返し説明した。その結果、患児からは「壁を触っちゃった。手を洗わなきゃ」「熱が下がった？うがいしてるから？」と清潔を意識して、清潔行動を実施する様子がみられた。

第4期：自立への援助

移植後生着が確認され、次第に制限が解除される中でも、清潔行動は守られていた。患児の自主性を高めることを目的とし、出来ている部分を褒め、励ました。患児は「ちゃんとできるよ、みててー」と看護師に手洗いの様子をみせてくれる。上手に出来ている事を褒めると笑顔になり、さらに念入りに手を洗う様子がみられた。

【考察】

中野ら[1]は、「健康障害を抱えている場合は、子どもが病気や治療を理解し、日常生活の中で療養法を実行できるように、セルフケア能力に応じた方法で教育する」と述べている。本事例も同様に、清潔行動の獲得において、セルフケア能力をアセスメントし、段階的な介入を行う必要性が明らかになった。

第１期、母親に清潔行動の必要性を説明する介入を行い、母親が患児の手本となった。患児の最も信頼できる母親が患児の手本となるように関わったことは、患児の清潔行動実施に、効果的であったと推察する。

第２期では、患児が清潔行動を習慣化できるように、成果表を作成した。幼児期の患児にとって成果が視覚的に明らかになることは、満足感や達成感につながり、清潔行動を習慣化する動機づけにつながったと考える。

第３期では、清潔行動の内面化、特に清潔、不潔の区別ができる事を目的とし、アニメのキャラクターを使って患児が清潔観念をイメージしやすいように介入した。幼児期は、汚い物に触れたらうつるという感染の概念が生まれる時期でもあり、アニメのキャラクター等を用いて、病気を理解する事も可能とされている。患児に親しみのあるキャラクターを使った事で、清潔観念はより受けいれやすいものになったと推察する。この頃の患児の言葉には、自分なりに目的をもって、清潔行動に取り組んでいた様子が看護記録からも明らかになっている。

第４期は、清潔行動の自立に向け、患児を見守る全員が、患児のできている部分を認め、褒めていった。結果、患児は自分の清潔行動に自信を持つ事ができたと推察する。幼時期は自分でやりとげたという満足感から自主性をより確かなものへしていく時期であり、今回の事例も同様に、課題達成につながったと推察する。

【結論】

事例から明らかとなった介入要素

1．身近に居て、お手本となる重要他者の参加
2．達成感を感じられる、視覚教材の選択
3．イメージ化しやすいキャラクターの利用
4．認め、ほめることで自信を持たせる
5．段階的な介入

【引用文献】

1）中野綾美：小児の発達と看護，株式会社メディカ出版，p4，2006